

埋蔵文化財発掘調査報告書

龜泉町華師塚古墳

1973.3.30

前橋市教育委員会
龜泉町土地改良正

まえがき

近来、団地造成、道路開渠の柱で盛んである。桑治の夢といふことがあるが、山を遡すぐらいは容易なことである。ブルトーザーや、シャベル車の後を追いかげると、必ず古墳の1つや2つは消えているし、遺跡地は破壊されている。鏡や移植コテで掘り自分をかえりみると、竹槍で溝がりをいつた過去を思いかして苦笑せざるをえない。文化財保護法も、カル法になり、一文化財保護担当者、血まみこになっても、文化財の保護は後手になつて、一目も二目も相手の目にのつてくよう。

文化財保護法では、埋蔵文化財といつて、掘りだされた土器類や、古墳の副葬品についての規定が主となつてゐる。この「物」は警察に届出て、厳重な管理を要求される。ところが、その埋蔵物があつた土地については、はつきりした規定がない。遺跡は遺物以上に重要であり、その保存・保護にはより以上の注意が必要である。「物がでなければよい」といつた考え方ば、その土地の歴史（人の生活遺構）をほらほし失っていくことになる。

そのためには、こまかに記録を上の層からも、石の組み方からも学びとつていかなければならぬ。

・古代人が生活した最も確実な資料が永久に葬り去られてしまうのはしない。
耳で調査しないからである。文献にのみ依存した歴史から、土くれの中に、
実際に人の生活の跡をたどることによつて更に新しい歴史を知ることができる。

龜泉町の土地改良事業は、新しい龜泉町の歴史を振りあてたといつていい。
既にいくつかの歴史の跡は、ほろび去つたが、さいわい、土地改良課、ならびに
龜泉土地改良区理事長 川野鬼子松氏はじめ、大山民、岡氏、土地所有者の善意か
ら、華師塚を調査しあえた。調査方法、期日などものたらぬことがあつたが、
ブルトーザーで、後かたもなくなる以前に記録しあつたことに感謝したい。

わがわくは、復元し、体験できることを願つてやまない。

昭和48年3月30日 社会教育係長 阿久津宗二

龜泉町華師塚古墳(上毛古墳等観)発掘調査報告
記載漏れ

所 在：群馬県前橋市龜泉町字前原209番地内 所有者 岩崎重司
調査期日：昭和48年3月1日～3月20日 ^{19m}

調査者：前橋市教育委員会社会教育係長 阿久津宗二
土地改良課職員名 富沢吉昭、市施鉄司 水見信国
明治大学学生 石井 敏子
根田和夫

調査経緯 龜泉町土地改良区が、土地改良に伴い道路の拡幅、土地改良事業の一環として、草、樹木の伐さいを行った結果、古墳と認知したものである。従来 祭師(石仏)をまつてあり、頂上部にメオト松があり、撤去して、龜泉聖園までの側道(上電線)構築に支障があることから 教育委員会に調査依頼をしてきたので、緊急調査を実施したものである。
(2月25日)

立 地： 龜泉町(中尾)地区、上毛電鉄の南側にあたり、寺沢川の右岸段丘にあたる。寺沢川の泥らんによる段丘と自然丘とに分まれた小円墳である。標高約100.2m 赤城南麓の南端、全体的には、旧利根の段丘である。上泉町、坂之下町にいたる古墳群の一古墳である。東南には坂の下の正円寺古墳が見ふれる位置である。県道前橋大胡線、セメントに至り、前橋病院の西を南へ約150m、南下したところに位置する。寺沢川に沿つた田園への傾斜地にあたるため南は斜面がなだらかであり、斜面上に築造したようである。

外部形式 封土の形式は円墳である。北は直路で削りとられ、その一部は空堀(新作)にまで及んでいる。南は斜面となり、豪傑のあとか原形を失っている。現状において 約20m、傾斜地であるため 南化は約25mで 小型なものである。
祭師像の安置してあったところから南は一段いくくけおりとされたりとされる。

葺石は頂上部より約4mまで及ぶが、西端より4mをくろりと葺いていたようである。封土の原型は西側において窪みによく保たれていた。

周辺は認めがたいが、西側において約1m50cmの土砂の埋め込みられた。斜面利用のため西及び北の土砂をもりあけたように見受けられた。

地輪は見当らなかつたが、石室上に須恵器の大甕一個分(径約45cm?)の出土をみた。つまり頂上部に大甕をすえ、頂点より約半径4mには石を葺かず、それより約3m50～4mにわたつて葺石があぐつている状態であった。葺石根石から 約18mの小円墳と確かめられた。

内部構造

内部は横穴式袖無型石室と認められた。石室開口部では破かい穴があり、奥通部の天井石及び西壁の崩かいがいとく確認が困難をきわめたので、北側奥壁の後ごめ部分より調査し、玄室を開拓した。天井石は奥壁より一枚の根状であったが、それより南は西壁と共に石室内に落下していた。

天井石を撤去した結果、石室は袖無型であつた。石室内は袖壁の石の落下ヒン研でほんと理解つていた。石を撤去した結果、玄室と奥通部の間に袖石を認めることができた。

玄室の全長2.35m、奥壁での巾幅1.10m、袖石下幅0.90mで、方形をなしておらず、奥壁の部分の高さ1.50mであった。壁面の軋いはほんと見られなかつたが、西壁や石室底部よりすつており、袖石部分より南はほとんど崩れていた。火山活動による環動の影響であろう。

石材は安山岩の自然石で、平面の石を選んでその面をむしたようである。奥通部の痕跡の状態は破かいがいとく確認できなかつたが、側壁の根石の部分が推測して全長5.20m余と考えられる。

なお石室の後ごめ石の状態は小石と白粘土でかためてあり、横穴式石室を想わせる築造方法がとられていた。

石室は奥壁の部分において石室幅1.10mの西側に後こう1.50mがあり。石室構築の終幅は約2.60mになる。

なお石室構築に当つては地盤(ローム褐色土)を約10cmほど切りとり。

基礎石を組み、白粘土でかため、壁をさすいでいる。

石室床面には10cm内外の自然石をばりその下に約2cm～5cmの河原石を敷きつめてあつた。その厚さは約15cmで青白の石であった。遺物はその中に出土したかどうかはひにり遺物をほとんどつかいしている。蓋石は空20cm深さ50cm長100cmであつた。

出土品（遺物副葬品等）

（封土中） 織毛器 大甕、織毛器碗。（頂上部より）

その他 石器 織文土器 石皿 1個。

（石室中） 直刀……4振

刀子……1個

耳環……6個（大4、小2）

管玉……2個

小玉……12個

鉄鎌……無柄 5個

鉄鎌……有柄 約30本

馬具（くわ、せの金具）

玄室内

表道内

これらは遺物調査計測が完了していないので後報としたい。

石室内の遺物の配置状況は前面のとおりであるが、中央稍々奥へよつたところに集中しており直刀は奥壁にそつて一振、西壁にそつて一振、相石にそつて二振の計四振、有柄の鎌は西壁奥壁面すみに集中していた。

奥壁より60cmの点で経50cmに骨粉、小玉、耳環、西壁に沿つて奥壁より50cmの地点に管玉と小耳環が出土した。

玄室中央部にはほとんど遺物は認められなかつた。

馬具は相石より南へ1.20mの地点で東壁にそつて出土した。

遺物の内容から遺体は3体ではなかつたろうか。特に耳環の出土位置、骨粉の出土状態、遺物の配列から推測するものであるが再考をまぬがれない。

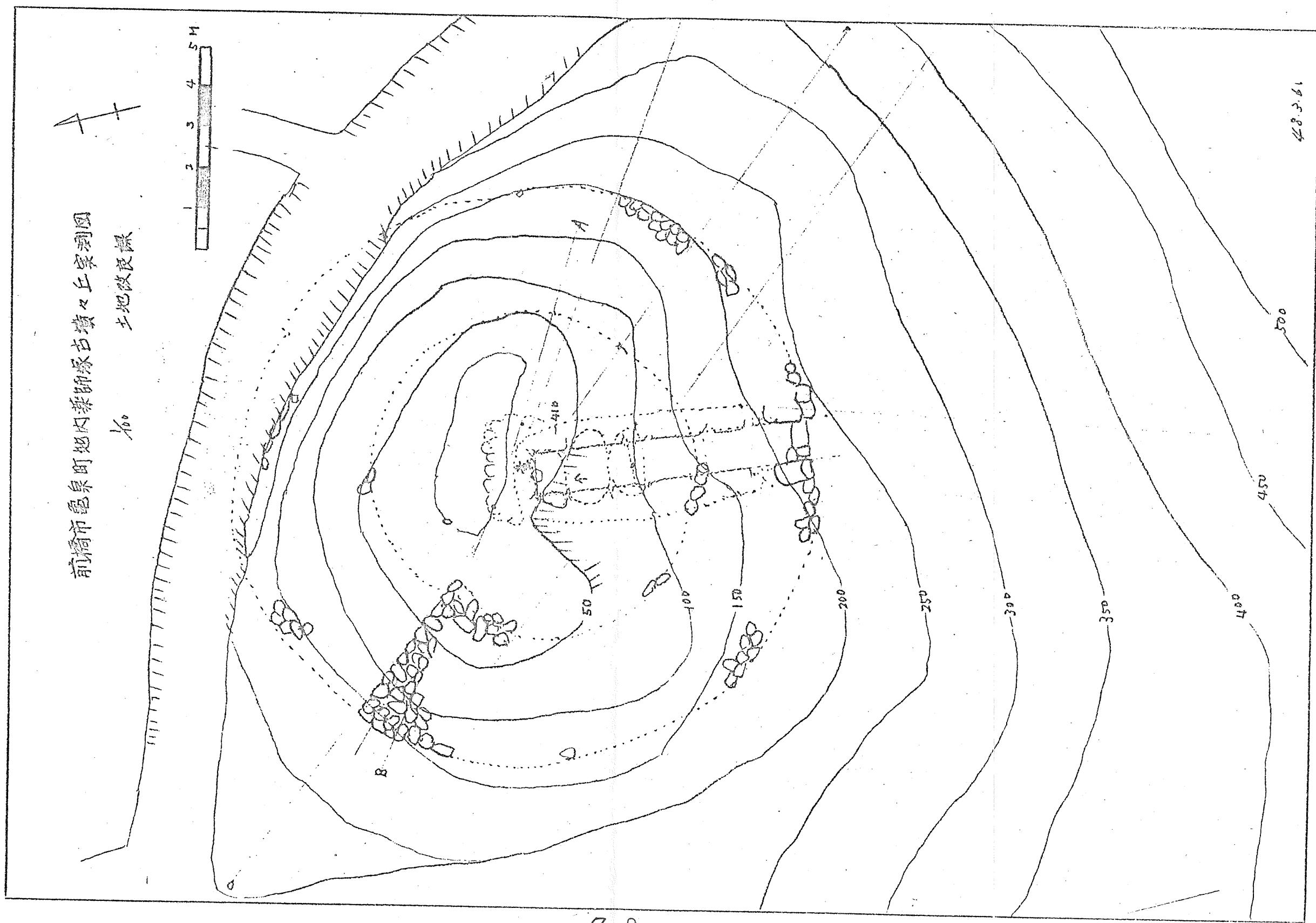
以上 龍泉町薬師原古墳の発掘調査の概報を述べたのであるが、その特徴を記すと

1. 斜面上に基は人をほりこんで築造した円墳である。
2. 袖無型の横穴式石室で自然石積みである。
3. 直刀が4振出土していて鎧をしている。
4. 石室床には転石が敷かれている。
5. 骨石が全面ではなく間隔のみである。
6. 頂上部より古式の織毛器の大甕が出土している。

等である。石室の形は古墳時代後期のはじめ頃のものと差えられない。封土構築の状態石室の西壁の崩かい、織毛器の出土等から推測して6世紀頃の古墳ではなかろうか。

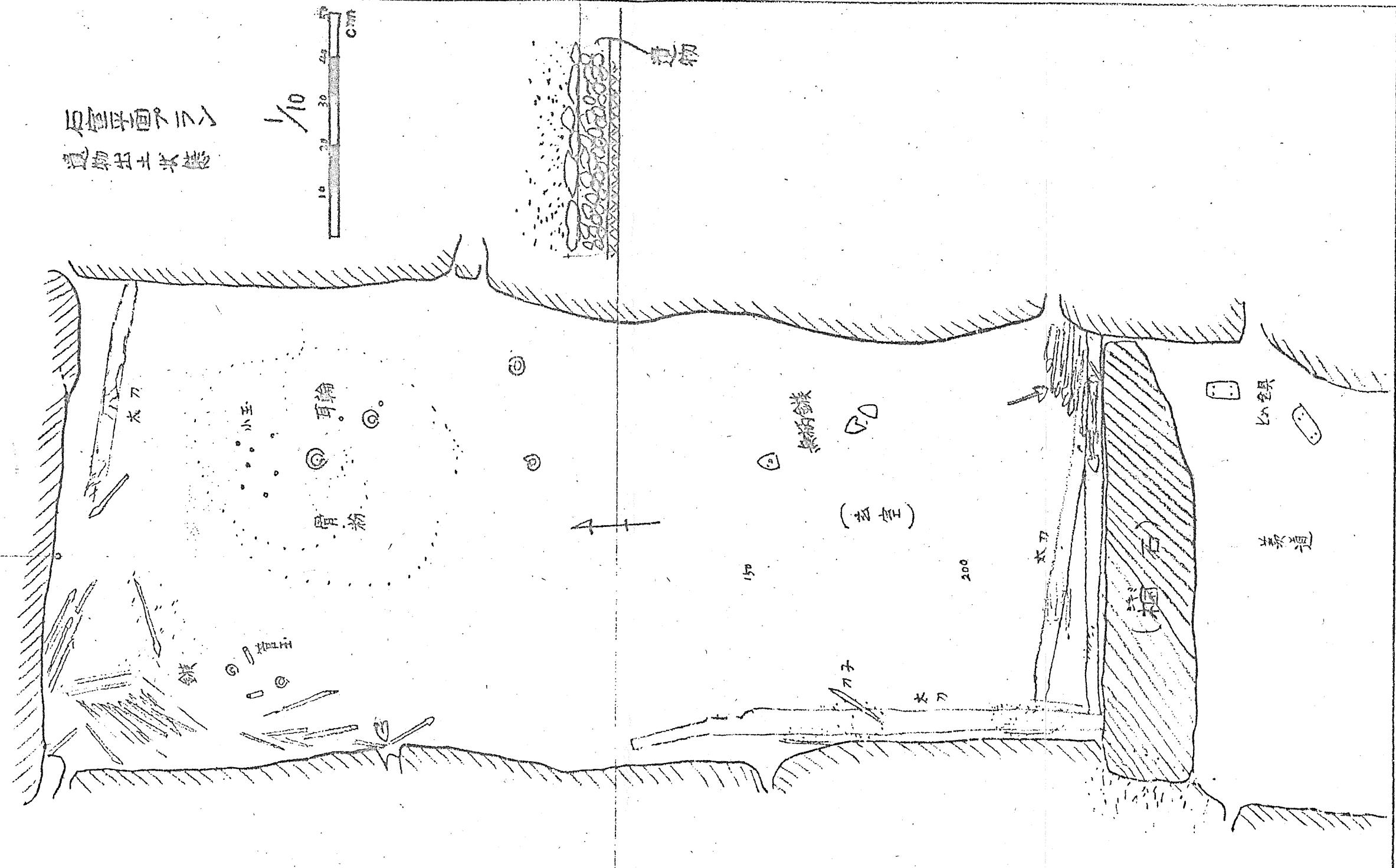
なお封土中よりの転石（火山灰土）遺物の調査等により研究を要する。

なお専門家の再研究をまつて本來の報告といいたい。

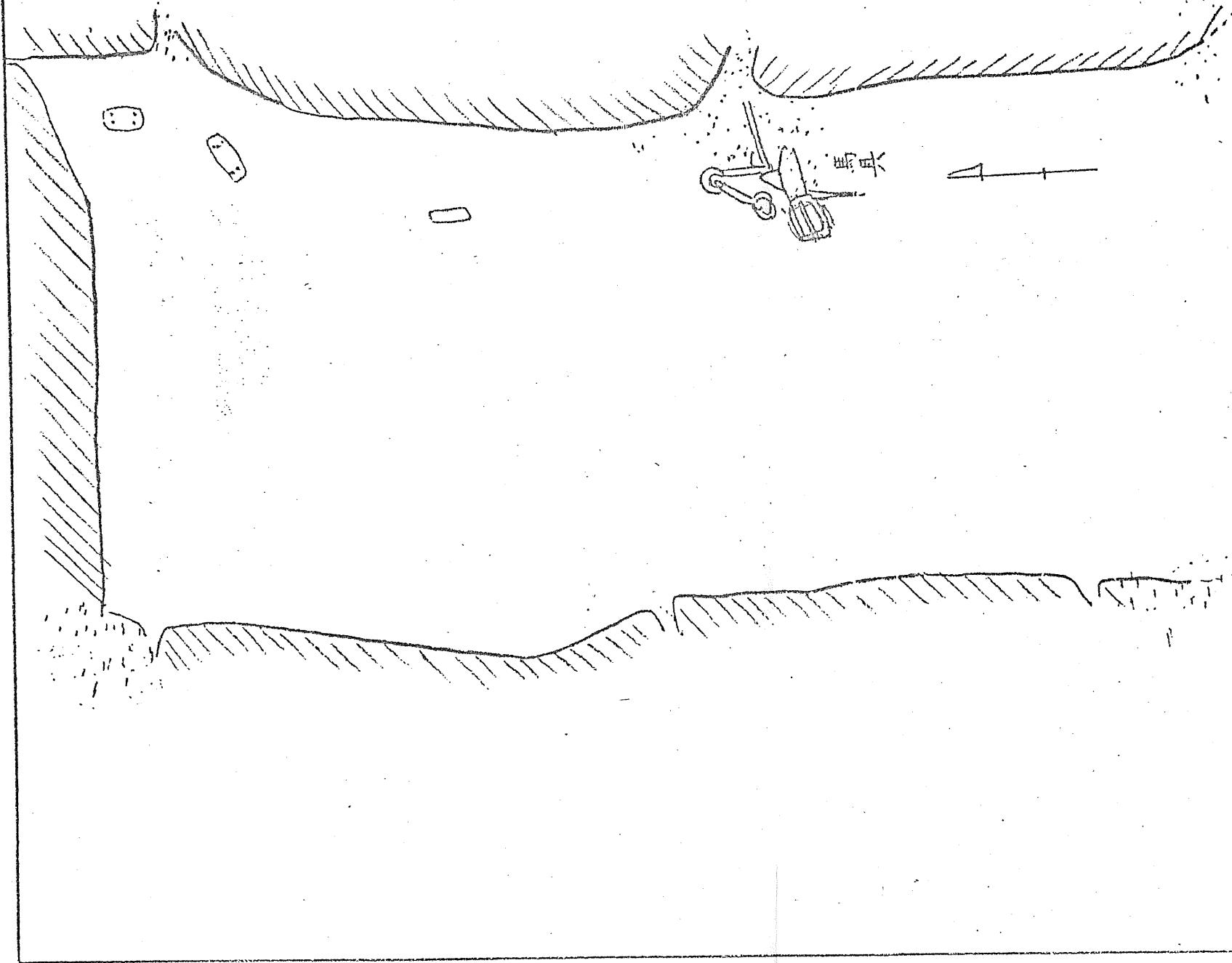


古宮平面アラン
遺物出土状態

1/10
cm

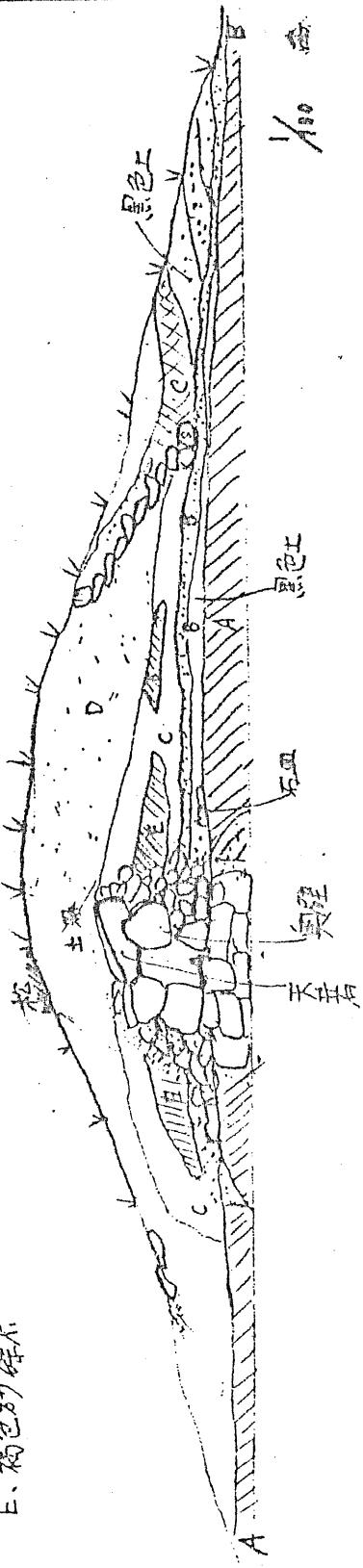


導道部



- 1、口一八(褐色土)
2、火山灰(小砾)
3、混合土
4、黑色土(褐色含)
5、褐色砂砾层

筆痕墓塚古墳斷面圖



石室
奥壁

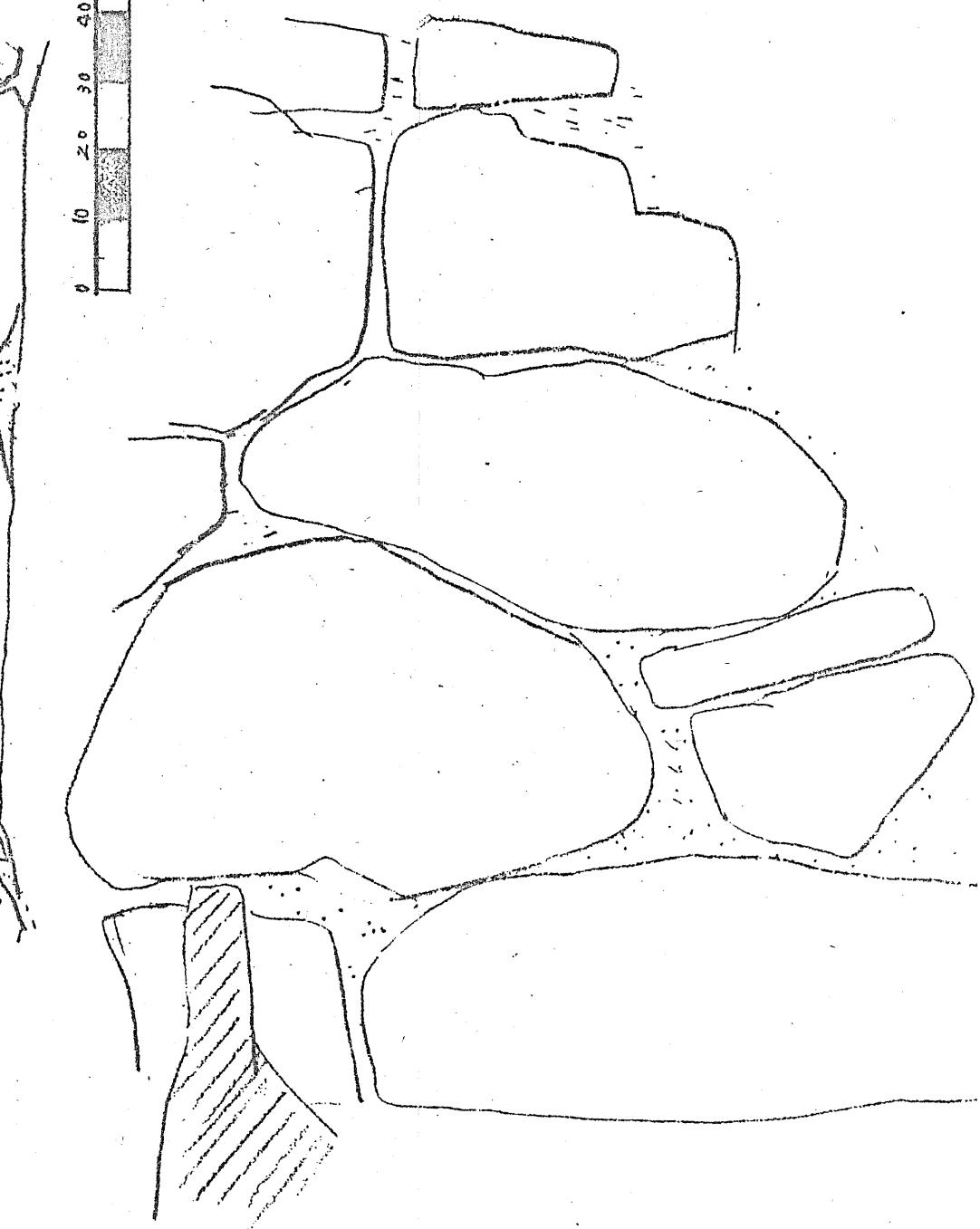
1/10

東壁

天井石

西壁

0 10 20 30 40 50 CM



石室 東壁プラン

